

## Philippe Quinault : *La Comédie sans comédie*

ジャンル	五幕韻文喜劇
初演年	1655年（マレー座）
出版年	1657年
出典	第三幕…セルバンテス『模範小説集』 <i>Novelas ejemplares</i> (1613) より『ガラスの学士』 <i>El licenciado Vidriera</i> 、他／第四幕・第五幕…タッソ『エルサレム解放』 <i>La Gerusalemme liberata</i> (1581)

キノーの4作目にあたる本作の特徴は、劇中劇を使用していることである。枠組みとなるひとつの喜劇の中に、パストラル、喜劇、悲劇、機械仕掛けの悲喜劇の4つもの演目を含む作品は他に類を見ない。作品は成功し、作者とこれを演じる劇団の才能の豊かさを見事に知らしめた。この作品は役者物の系譜に連なるが、演劇の擁護それ自体を目的としてはおらず、全幕が愛のテーマに貫かれている。キノーは5つの物語を通して、現実と虚構、あるいは真実と偽りという、演劇の、そして恋愛の本質的な二面性を描き出した。作品にみなぎる音楽性やスペクタクル性からは、後にオペラで大成することになる若い劇作家の才能がうかがえる。

[第一幕] 舞台はパリ。夜。役者オートロッシュとその召使ジョドレが一悶着起こす。そこへ商人ラ・フルールの息子シュヴァリエが駆け付け騒ぎが収まると、オートロッシュはアマントへの愛をその兄であるシュヴァリエへ訴える。シュヴァリエは妹の愛を請け負い、自らの恋の悩みを打ち明ける。昨夜舞踏会で会った見知らぬ美女が忘れられないのである。オートロッシュの歌に、女声高音が呼応して響く。別の役者ラ・ロックが、シルヴァニールのために妹ポリクセヌに歌わせているのである。そこへアマントとシルヴァニールの姉妹がやって来る。オートロッシュとラ・ロックが各々愛を捧げていると、シュヴァリエが驚嘆の声を上げる。先刻の歌声の主が昨夜の美女だとわかったからだ。シュヴァリエの想いにポリクセヌも応える。そこへ、財産を波に吞まれ狼狽した様子 of ラ・フルールが帰って来る。彼は娘たちに言い寄る男たちが役者だと知り怒るが、役者たちは説得のため劇を演じて見せることを提案する。

[第二幕] 翌朝。オートロッシュが座席にラ・フルールを案内し、劇中劇の始まりを告げる。舞台はある島の中。サテュロスたちは羊飼い娘クロミールを狙っている。その姉であるドリーズは亡くなったものと思われていたが、奇跡的に助かり男装して戻って来ていた。彼女の婚約者であった羊飼いファイレーヌは、今はその妹と婚約している。森で独り言ちるファイレーヌ。恋敵の羊飼いダフニスは身を潜め木霊のふりをしていたが、ついには姿を現し、ふたりは口論になる。やって来たクロミールの仲裁を受けても、自分に分があると互いに譲らない。ダフニスが立ち去ると、ファイレーヌは眠り込む。サテュロスたちが彼を襲おうとするのを、ドリーズが追い払う。目覚めたファイレーヌにドリーズが怒りをぶつけると、ファイレーヌは相手の正体に気付いて懺悔し、ドリーズは怒りを

鎮める。そこへクロミールとダフニスがやって来る。サテュロスたちにさらわれそうになったクロミールをダフニスが助けたのだ。ドリーズが正体を明かし、4人は2組の結婚の準備をするために家に入る。

[第三幕] 舞台はトレド。イザベルが恋人テルサンドルへの手紙を侍女マリーヌに託す。イザベルの父パンフィルがやって来て、マリーヌは手紙を取られてしまう。パンフィルは娘から若い恋人への手紙に違いないと怒るが、マリーヌは手紙の意味を読み換えて姉へのものだと納得させる。イザベルとマリーヌが話しているところに小使の恰好をしたテルサンドルがやって来る。彼は召使いラゴタンと一緒にわざと学士の奉公人に加わったのである。そこへ狼狽した様子パンフィルが帰宅する。学士が発狂し、自分がガラス化したと思込むようになったという。小使に扮したふたりが奇妙な言葉遣いで話し、パンフィルは困惑する。そこへ藁にくるまれた学士がやって来る。パンフィルが藁を剥ぎ取ると、学士は気絶し、意識を取り戻すが、魂が地獄に堕ちたと錯覚する。パンフィルとの問答の末、学士は再び意識を失い、生身の人間として目覚めるものの、結局結婚を諦めて去ってしまう。テルサンドルが正体を現しイザベルに求婚すると、パンフィルは喜んで受け入れる。

[第四幕] 舞台はエルサレムの近く。愛を訴えかけるキリスト教徒の騎士タンクレードを振り切って、イスラム教徒の女戦士クロランドが去る。彼女の侍臣アルザスがやって来るので、タンクレードはクロランドの無事を伝えて去る。クロランドが引き返して来て、アルザスに事情を説明する。そこへアンティオキアの王女エルミーヌがやって来て、タンクレードへの愛を打ち明けるので、クロランドは武具の交換を持ちかけ、気持ちを確かめてみることを提案する。タンクレードがやって来て、クロランドの武具を身に付けたエルミーヌに愛を語る。エルミーヌは喜ぶが、話を進めると彼の想い人はクロランドであると気付く。エルミーヌは正体を明かさぬまま憎しみの言葉を吐き捨てて去る。キリスト教徒の高楼が燃えている。変装したクロランドに殺された友人の仇を討とうと、タンクレードは敵の正体を知らぬまま追う。闘いの末、タンクレードは致命傷を負った相手の兜を取り外してやり、その正体が愛する人であると知る。クロランドは息を引き取り、タンクレードもやがて倒れる。

[第五幕] 舞台はエルサレムの近くの魔法にかけられた島の中。イスラム教徒の魔女アルミードが魔法で島の様子を一変させ心地良いものにする。彼女はキリスト教徒の騎士ルノーへの復讐のため、叔父イドラオを地獄から召喚する。イドラオの亡霊が出て来て、ルノーがアルミードに対して恋の熱情を抱いていると知らせる。ルノーがやって来るので、イドラオは彼がひとりで島に入るよう仕向ける。ルノーが芝生で横になっていると、トリトンとシレーヌが現れて歌い出す。ルノーは眠り込む。復讐しようとやって来たアルミードだったが、眠るルノーを目の当たりにして心が揺らぐ。そこへ愛の神が現れ、ルノーへの愛を吹き込む矢をアルミードに射当てて飛び去る。ルノーへの愛に屈したアルミードは、愛の神に呼びかけ、自分たちを運び去って欲しいと願う。アルミードの願いは聞き容れられた。ルノーとアルミードは愛の神に連れられて見知らぬ世界へと運ばれて行く。娘が死んでしまうと錯覚し取り乱すラ・フルールをラ・ロックがなだめる。ラ・フルールは劇を観て満足し、喜んで子供たちの結婚を認める。

(高安理保)

## Philippe Quinault : *Belléophon*

ジャンル	五幕韻文喜劇
初演年	1671年 (オテル・ド・ブルゴーニュ座)
出版年	1671年
出典	アポロドロス『ギリシア神話』 <i>Bibliotheca</i> 、ヒュギーヌス『神話集』 <i>Fabularum liber</i> 、その他

キノーの上演向けの作品としては20作目に当たる本作は、この作家のキャリアにおいてひとつの区切りとなる作品である。キノーはこの作品を最後に劇作品の執筆を離れ、音楽家リュリと組んでオペラの台本作家としての仕事に専念することになる。リュリ/キノーによるオペラは後期三部作を除いてすべてがギリシア神話から題材を採っているが、オペラの直前に成る本作でも、キノーは神話的主題を選択している。グロによれば、物語の大筋はアポロドロスやヒュギーヌスに基づいているものの、エウリピデスの『ヒッポリュトス』 *Hippolytus* やセネカの『パエドラ』 *Phaedra* との関連性が見受けられる他、とりわけ後半の核となる怪物との戦闘描写については同時代のゴンベルヴィルによる小説『ポレクスンドル』 *Polexandre* からの影響が認められる。様々な原典から着想を得て自由にアレンジを加えることで独自の作品を仕立てるのはこの作家の特徴と言えよう。作品はある程度の成功を収め、初版の翌年には同じ出版社から第二版が出されている。なお、同名のオペラ『ベレロフォン』は、トマ・コルネイユとフォントネルの台本でリュリにより1679年に初演される別作品である。

舞台はリュシー国の首都パタール。

【第一幕】 アルゴの王ブルーテュスは腹心リカスに喜びを語る。リュシー王イオバスの長女ステノベとの結婚が近付いているのだ。彼はひそかに、亡命して自分のもとに身を寄せている親友、エフィールの王子ベレロフォンを、許嫁の妹フィロノエと結婚させたいと望んでいる。しかしベレロフォンはステノベの命令で国を出て行かなければならないことになっていた。ステノベが彼の追放を決めた真の理由は、じつは彼女がベレロフォンを愛しており、しかしこの英雄は彼女を愛さないどころか妹を愛しているということだった。ステノベはベレロフォンが落とした書字板がその証拠だと言うが、侍女メガールは宛名の無いその書字板を見てステノベ自身への恋文である可能性を訴える。ステノベは侍女に頼んでベレロフォンの本心を探らせることにする。

【第二幕】 メガールによればベレロフォンはフィロノエに無関心を示したという。ステノベは妹の気持に探りを入れる。フィロノエは家族のために自分より身分の低いベレロフォンとの結婚を受け入れると言うが、ステノベはベレロフォンからの拒絶を妹に伝え、彼女に相応しい結婚をさせることを約束する。フィロノエは侍女ラディスに悔しい気持ちを打ち明ける。彼女はベレロフォンから

の拒絶が信じられず、姉の策略を疑っている。そこへベレロフォンがやって来て、フィロノエとの結婚ではなく追放を選んだ理由を説明する。彼はステノベの罠を恐れ、フィロノエの身を案じて結婚を拒絶したのである。さらにベレロフォンがフィロノエへの愛を打ち明けるので、彼女も彼を憎からず思う気持ちを漏らし、言葉を濁して立ち去る。

[第三幕] プルーテウスがステノベに自分たちの結婚の日取りを告げる。彼によればベレロフォンは出立前にステノベに会うことを強く求めているという。ステノベは面会を許可するものの、ベレロフォンに想われているのかと思うと激しく動揺し、会うことをためらう。ベレロフォンがやって来る。彼はステノベの寛大な態度に甘んじて、フィロノエと想いあっていることを打ち明ける。ステノベは執り成しを約束してベレロフォンを立ち去らせる。結局ベレロフォンの愛が妹へのものだとわかったステノベは、侍女に悔しさを訴え、自身の破滅をもいとわず復讐を決意する。

[第四幕] フィロノエとプルーテウスはともにステノベを待っている。プルーテウスはフィロノエに感謝し、ベレロフォンに王位を譲る考えでいる。ステノベが狼狽した様子で出て来る。彼女はベレロフォンが落とした書字板を見せ、これが自分にあてられた恋文だと言う。怒りに燃えるプルーテウスに、復讐の役目は自分に任せて欲しいと言ってステノベは去る。残されたふたりが嘆いているところに、ベレロフォンがやって来る。フィロノエは彼の話を知ろうともせず立ち去り、プルーテウスも同様に恨み言を吐き捨てて行く。困惑するベレロフォンだが、衛兵隊長ティマントが自分を逮捕しに来るので、すべてステノベの仕業だと悟り、自らの死を望む。

[第五幕] 悲しみに沈むフィロノエが、ベレロフォンが死んだという噂を姉に知らせる。ステノベは信じられずにいるが、ベレロフォンの護衛についていたはずのティマントが戻って来る。彼によれば、ベレロフォンは移送される道すがら突然現れた怪物に立ち向かい犠牲になったのだという。ステノベはベレロフォンの潔白と自らの罪を公然と告白し、自害をほのめかして立ち去る。プルーテウスがやって来て、ティマントの話の続きとしてベレロフォンの勝利をフィロノエに語り聞かせ、英雄を讃える民衆が大挙して彼女とベレロフォンの結婚を求めていると知らせる。フィロノエが王にベレロフォンの潔白を伝えたところで、ステノベが自害したことが報告され、プルーテウスは嘆きながら立ち去る。ベレロフォンが帰還し、フィロノエと再会を果たす。ふたりは愛を確かめあい、親や友を慰めようと思案する。

(高安保)